J.H.デ・フロート著『装飾デザインにおける三角形』の概要 および出版の意図と著者の構想について

ON OUTLINE OF A WRITING BY J.H. DE GROOT "DRIEHOEKEN BIJ ONTWERPEN VAN ORNAMENT" AND INTENTION OF ITS PUBLICATION AND CONCEPTION OF THE AUTHOR

濱 寄 良 実*, 矢 代 真 己**

Yoshimi HAMAZAKI and Masaki YASHIRO

The aim of this study is, at first, to make clear outline of "Drie hoeken bij ontwerpen van ornament" written by J.H. de Groot and, then, to clarify the intention of publication and the conception of the author from the texts in the writing.

As the result, the following matters became clear. 1. "Drie hoeken bij ontwerpen van ornament" was a joint work with his sister Jacoba, but the contents may say that it is de Groot's own achievement. 2. Contents of the writing seem to be a textbook of basic drafting technique and have unique characteristics of use a set square for designs of ornamentation. 3. As intention of publication, it could be assumed the use to industrial arts education, and, on the other hand, there was the principal objective in the spread of de Groot's own drafting method. 4. De Groot's conception in the work was to ask the world the spread of drafting method to occupy creation instead of imitation of past styles and natural forms if possible and the propriety.

The drafting method and the examples introduced in the writing had enough contents and persuasive power for suggesting a possibility to a creation, and, in this connection, it became simultaneously clear that possible to point out the reason why the architects of the same period were attracted by the writing.

Keywords: *Modern Architecture, Holland, J.H. de Groot, H.P. Berlage, Systematic design method, Drie hoeken bij ontwerpen van ornament*

近代建築、オランダ、J.H.デ・フロート、H.P.ベルラーヘ、体系的設計手法、装飾デザインにおける三角形

1. はじめに

建築史家レイナー・バンハム (Reiner Banham) は、『第一機械時代の理論とデザイン』のなかで、建築家ヘンドリック・ペトルス・ベルラーヘ (Hendrik Petrus Berlage, 1856-1934) の業績、とくに「アムステルダム証券取引所 (koopmansburs te Amsterdam, 1903)」の造形の特質について触れて、ベルラーヘの「仕事の大部分はこの比例のシステム (proportional system)」に捧げられている、としている。これはベルラーヘが同建築の設計に際して用いた 5:8 という比例のエジプト三角形による体系的な設計手法を指した言説である【図-1】。そして、この「比例のシステム」に関わる問題には、ベルラーヘのみならず、同時代のアムステルダムの建築家の多くが夢中になっていた、とも述べている¹⁾。

こうした設計手法の先駆的研究者として、ベルラーヘは当時、建築家カレル・ペトルス・コルネリス・デ・バーゼル (Karel Petrus Cornelis de Bazel, 1869-1923)、建築家ヨハネス・ルドフィクス・マチュー・ラウヴェリクス (Johannes Ludvicus Mathieu Lauweriks, 1864-1932)、そして教育者で理論家であったヤン・ヘッセル・デ・フロート (Jan Hessel de Groot, 1865-1932) の名前を挙げている²⁾。特にデ・フロートの理論について、ベルラーヘは、

H.P.ベルラーヘ、「アムステルダム株式取引所立面図」、出典: Tummers, N.H.M., J.L. Mithieu Lauweriks LECTRA ARCHITECTONICA, HILVERSUM, 1968

「同断面図」および「エジプト三角形」拡大
出典: Bok, M., ANFÄNGE EINER NEUEN
ARCHITEKTUR, FRANZ STEINER
VERLAG GMBH, WIESBADEN, 1983

【図-1】

* 日本大学短期大学部建設学科 非常勤講師・博士(工学)
** 千葉工業大学工業デザイン学科 非常勤講師・博士(工学)

Lecturer, Dept. of Construction, Junior College of Nihon University, Dr. Eng.
Lecturer, Dept. of Industrial Design, Chiba Institute of Technology, Dr. Eng.

「近代の比例理論に注目すべき成果をもたらす」と評価し、自らもデ・フロートの理論に従って仕事を進めてきたことを述べ、さらに「デ・フロートに私淑している」、との言説も後に残している³⁾。

ところで、そのデ・フロートの主著のひとつとされる『装飾デザインにおける三角形 (Driehoeken bij ontwerpen van ornament, 1896)』は、オランダの装飾芸術の方向性を決定付けた著作であるといわれてきた。そして同著作の影響は装飾芸術の領域に留まらず、建築界にも及び、ベルラー以外にも、アムステルダム派の建築家として知られるミシェル・デ・クレルク (Michel de Clerck, 1884-1923) らへの影響なども指摘されている⁴⁾。また特に同著作は、前記の「比例のシステム」の普及という問題と深く関連しており、したがってオランダ近代建築の勃興期の詳細を考察する際、決して無視することのできない重要な文献であると考えられる。

ところが、『装飾デザインにおける三角形』の具体的内容について、またオランダ近代建築史という枠組みにおける同著作の意義については、必ずしも明確にされているとはいえない。

そこで本稿では、デ・フロートの『装飾デザインにおける三角形』のオランダ近代建築史における意義の検証の前提作業として、同著作の構成、そして具体的内容について考察する。その上で、同時に同著作の出版の意図、および著者の構想について、明らかにしたい。

2. 『装飾デザインにおける三角形』の著者および形式と構成⁵⁾

デ・フロートの著作とされる『装飾デザインにおける三角形』は、後述するように、実際は、姉ヤコバ (Jacoba M. de Groot, 生没年不詳) との共著である⁶⁾。1896年10月の出版で、A-5版をひとまわり小さくしたサイズの、白紙頁などを含めて全92頁という体裁であり、いわば小冊子の如きものといってよい。青色の背表紙で、赤と黒の二色刷りの表紙は、後述する同書の内容を象徴する装丁となっている【図-2】。3頁目に当たる扉には、同書名の下に、サブタ

【図-2】
『装飾デザインにおける三角形』
表紙

【図-3】
『装飾デザインにおける三角形』の扉

イトルとして「独習者、指導教官のために」とある。その下には筆者ヤン・ヘッセル・デ・フロートの名前と、「建築家」および「アムステルダム・クエリヌス工芸学校 (1879年設立) の教師」という2つの肩書きが記されている⁷⁾。共著者である姉のヤコバの名前もその下に記されているが、肩書きは明記されていない【図-3】。

同書は全5節、すなわち、「前言」(計2頁)、「目次」(計2頁)、「序論」(計3頁)、「図版解説」(計20頁)、そして「図版 (52点)」(計52頁)という構成になっている。このうち「目次」を除くすべての文章の末尾部分には、ヤン・ヘッセル・デ・フロートとの記名が付されている。したがって、姉のヤコバとの共著となっているものの、事実上、本小冊子はほとんどヤン・ヘッセル・デ・フロート単独の執筆によるものであったと考えてよい。つまり主著者は、ヤン・ヘッセル・デ・フロートであり、姉ヤコバの関与は図版制作の協力程度であったと推測される。

3. 「前言」にみるデ・フロートの言説⁸⁾

『装飾デザインにおける三角形』出版の意図、さらに主著者であるヤン・ヘッセル・デ・フロート (以下、デ・フロートと略記) の同著作執筆の構想を明らかにするために、まず、同著「前言」にみるデ・フロートの言説を順を追って見ていきたい。

「前言」は「過去数年間、わたしはまったくわたし自身のための研究を行ってきた」という言葉で始まっている。デ・フロートはこの研究を「製図と意匠の領域における確たる事実を探索する作業」と位置づけている。作業は「決して借用する (過去に戻る) ことなく、つねに前進し続ける」ように行ったという。そしてデ・フロートの達した結論は以下の事柄に対するデ・フロート自身の無知の認識であったと述べられている。それはすなわち、「製図というものは非常に単純なものであり、意匠は明解なかたちで現われ、製図は実際、しばしばそのように行われ、また意匠はそのように表現されることが必然とされてきた」こと、である。デ・フロートのこうした認識は、同時に、「過去の様式時代においては実際に規則 (weten) とされていた、感情や偶然に基づく多くのものを、数学的に位置づけることを満足させる」ものであった、という。

ここでデ・フロートが示唆する製図法に関連して、「前言」では、それが「かつては明確に意識されていたが、僅かにしか考慮されてこなかったために次第に忘れ去られ、失われたものとなっていたのか、あるいはそうした方法自体がいわば奥義 (atelier-geheim) として伝承されてきたのか」、という問題にも言及しているが、デ・フロートはこうした問題に対して、明確な答えを提示することを避けている。ただ、いずれにしても単純な事実を複雑に説明することは「愚行」であり、事実の「過大評価」、あるいは逆に「軽視」に繋がる危険性を孕むとのみ指摘する。その上で、①諸フォルムの簡単な現出とその確たる事例の明示、②装飾的構成における統一性を確立するための手法の提示、以上2点を目的に、多角的な視点による考察を重ねた結果として、デ・フロートは、姉のヤコバの助けを借りて、線装飾、植物装飾、動物装飾、そして文字 (タイポグラフィ) といった一連の図版を作成したことを記述し、「前言」を締め括っている。

続いて「序論」の内容を追ってみたい。

【表-1】『装飾デザインにおける三角形』図版一覧

図版番号	図版タイトル	作成者	具体的内容
1	15, 30, 45, 60, 75度; 45度と60度(30度)の三角定規での作図	M	2枚の三角定規によるさまざまな角度の作図
2	45度の三角定規と円の8分割	M	45度の三角定規の使用法と円の8分割方法
3	60度の三角形と6角形	M	60度三角定規の使用と正三角形の4分割、六角形
4	60度のシステムと30度のシステム	M	正三角形(60度)格子と60度-30度グリッドの図
5	帯状装飾における60度の角度	M	60度の角度による帯状装飾の事例解説図
6	60度と30度の三角形を用いた30度の角度	M	30度の角度と六角形の関係
7	帯状装飾における30度の角度	M	30度の角度による帯状装飾の作図法
8	60度の対角線を持つ四角形	M	四角形格内に60(30)度の対角線を書く作図法
9	30度と60度の角度。円の3分割、6、12分割	M	60-30度三角定規による円の3、6、12分割法図解
10	30-60度の角度によって作られた図	M	30-60度の角度を使った作図の方法と事例
11	帯状装飾における30度と60度	M	30度と60度の直線を使った帯状装飾の作図法図解
12	30度と60度の線の角度によって構成された線取り	M	30度と60度の直線を使った線取り装飾作図法図解
13	帯状装飾における30度と60度	M	60度の三角定規使用の帯状装飾の作図法と事例
14	三位一体、30-60度の三角定規による線の分割(2, 3, 4, 6, 8, 9, 12分割)	M	3要素の統一と要素分割の方法の図解
15	30度と60度のシステムによる波形	M	波形装飾の作図法を図解
16	30度と60度の角度の線による線取り	M	30-60度の角度を使った線取り装飾の事例
17	装飾に適用された60度のシステム	B	正三角形格子による平面装飾の事例
18	装飾に適用された30度のシステム	B	60-120度格子による平面装飾の事例
19	60度のシステムによる木版画	B	正方形格子による木版画作品の事例
20	2枚の三角定規の明解な使い方。15度と75度	H	2枚の三角定規で15、75度を得る作図法と応用
21	2枚の三角定規の明解な使い方。円の24分割	H	2枚の三角定規による円の24分割法図解
22	24等分割された薔薇状の円	B	円の24分割図解
23	4, 6, 8, 12, 24分割された薔薇状の円	H	円の分割法の図解
24	15度、30度、45度、60度、75度の角度を使った円の実践	H	円のさまざまな分割装飾の方法と事例
25	二重のリズムの帯	H	折り重なられた直線による帯状装飾の作図
26	二重のリズムの帯	H	同上
27	正方形とその中の30度と60度	H	正方形の分割装飾法の図解
28	四角形とその中の15度と75度	H	同上
29	四角形と15度、30度、45度、60度、75度という角度	H	同上および事例
30	同一のシステムによる四角形の装飾	H	同上
31	15度、30度、45度、60度、75度のシステムによる装飾	H	装飾の事例
32	三角形定規による線の分割(5, 7, 13, 14, 15分割)	H	三角定規を使った線(長方形)の分割法図解
33	さまざまなシステムによる文字形態	H	タイポグラフィーの作成図解
34	同一システムによる大文字のアルファベット	H	同一システムによるアルファベットの作図法図解
35	あるタイプの装飾文字によるゴシックのアルファベット	H	ゴシック書体の作図法と事例
36	内部に15, 30, 45, 60, 75の角度で装飾されたフォルムを持つ正三角形	H	正三角形を基にした装飾の作図と事例
37	内部に15, 30, 45, 60, 75の角度で装飾されたフォルムを持つ正方形	H	正方形を基にした装飾の作図と事例
38	内部に15, 30, 45, 60, 75の角度で装飾されたフォルムを持つ円形	H	円を用いた装飾作図法と事例
39	三角定規を用いて描いた植物装飾の枝	H	植物文様装飾の作図法と事例
40	三角定規を用いて描いた精緻な枝	H	同上
41	三角定規を用いて描いた葉と花	H	葉と花、茎の線取り装飾の作図例の解説図
42	三角定規を用いて描いた動物の輪線	H	蝶、鳥、獣(ライオン)の作図法解説図
43	三角定規を利用した鳥の輪線	H	鳥の図案の作図、解説、事例
44	三角定規を用いて描いた人体図	H	人体の図案作図解説
45	三角定規を用いた、応用された装飾	H	応用事例を掲載している
46	学生の設計	L	植物線取り装飾(BW)
47	学生の設計	L	同上(BW)
48	学生の設計	L	同上(BW)
49	学生の設計	L	同上(BW)
50	学生の設計	L	幾何学文様の線取り装飾事例(C)
51	学生の設計	L	同上(C)
52	学生の設計	L	同上(C)

凡例： 図版作成者欄の記号Hは、J.H.de Groot, MはJ.M.de Groot, Bは作成者署名無し(これはJ.H.de Grootの作品)。

なお、具体的内容欄の記号(BW),(C)はそれぞれ図版に彩色が施されていないもの、彩色が施されているものを示している。

4. 「序論」の内容について⁹⁾

「序論」において、デ・フロートは適宜、図版(図版一覧を【表-1】に示す)の参照を求めながら、前節で触れた2点の目的を達成すべく、自らの製図法の解説を行っている。

まず「序論」冒頭で、デ・フロートは自らの紹介しようとする製図法を「小作業(werkje)」と呼ぶ。「小作業」には「45度および60度(30度)の三角定規を補助的な道具として用いたことを述べる。そして、それらの三角定規を用いることで、「15度-45度-60度-75度の角度が導き出せる」ことを説明し、図版1の参照を求める【図-4】。そして2枚の三角定規を使って行われたこの「小作業」の目的が「製図法を確立すること」、さらにその製図法により作成された図版の「諸事例は如何なる歴史的様式も借用していない」こと、を強調する。

デ・フロートの構想、さらに具体的にいえば、創造という行為をデ・フロートがいかに捉えていたかを知る意味で、「序論」の次の言説は重要であろう。

【図-4】

『装飾デザインにおける三角形』の図版1；15,30,45,60,75度；45度と60度(30度)の三角定規での作図

【図-5】図版 21 「2枚の三角定規の明解な使い方。円の24分割」

【図-6】図版 25 「二重のリズムの帯」

【図-7】図版 26 「二重のリズムの帯」

【図-8】図版 27 「正方形とそのなかの30度と60度」

【図-9】図版 14 「三位一体、30-60度の三角定規による線の分割」

【図-10】図版 30 「同一システムによる四角形の装飾」

【図-11】図版 47 (左)、図版 51 (右) 「学生的设计」

平面装飾の意匠というものは、純粋に平面に分割することである。
自然からの様式学習とは自然の形態の剽窃作業である場合が多い。人間が自然から拝借できるのは、たいていはそうしたものである。
創造に至る者は、直接的な剽窃を認めることはないであろう。
われわれは事実上則ってモチーフを育まねばならない。それは人間の装飾への意志であって、そのためにすべてが推し進められる。そしてその帰結としての、平面構成が必要とされるのである。

さらに続けて、デ・フロートは自らの製図法の特徴を次のように論を展開する。

諸図版の作成方法は、通常の方法とは逆転されたものとなっている。一般に、ほとんどの場合は、あるフォルムを自然の形態と捉え、そしてそれ自身を目的として考える。つまり、はじめにモチーフありきで、リズムは二義的に捉えられている。

この小作業においては、全体としての整合性を有する統一的なものもろものが第一義とされる。つまり、はじめにリズムありきで、モチーフは二義的なものとされる。換言すれば、モチーフはリズムに変換されるのである。

また「序論」のなかで繰り返して、デ・フロートは自らの製図法

が「自然の形態の剽窃」ではないことを強調しながら、その新しさについては次のように主張している。すなわち、「この小著の新しさは製図板上での三角定規の、全体を通じての利用にある」と。したがって、そうであるがゆえに「統一性」は必然的に「保証」され、「統一性の欠如の心配も無用」であり、さらに「それ以上の手段は危険をもたらすことになる」とさえいう。

個別的な、やや仔細な図版の説明の後、「前言」の内容を繰り返すかのように、次のような言葉で「序論」は閉じられている。図版 21【図-5】、25【図-6】、26【図-7】、27【図-8】を指して、2枚の三角定規から得られるさまざまな角度の方向性を相互的に取り込んで利用することは、「装飾に対するわれわれの力を大きなものとさせる」。そして「それはおのおのの様式時代において、幾度か行われたものに違いない」が、「しかし我々の時代においては、それは規則の一つに過ぎず、あるいは直視されていないのか、あるいは過小評価されている」との解釈も示している。そして、「これについては図版 25 のテキストを見よ」との指示を出している。

指示通り、図版 25 の図版解説を見てみると、2枚の三角定規から得られるいくつかの角度をもった直線を組み合わせることで、さまざまな装飾のヴァリエーションを導き出せることが説明されている。そしてそこでは、製図法の応用の充分な可能性が唱えられ、また実

際に同様の手法で、装飾を作成することを読者に促してもいる。

5. 「図版解説」、および「図版」について

「図版解説」は、タイトルそのままに、後に続く「図版」の内容の解説である。「図版解説」の中には、特に製図法に関する理念的な部分のデ・フロート自身の主張は見出せない。興味深いのは、いくつかの図版の具体的な作図法の解説のあとに、作図上の留意点を列記したり、また示された手順に従って実際に作図することを読者に促し、解説した作図法を利用して読者に事例と異なるヴァリエーションを作成してみよ、との指示があることである。実際、同著のサブ・タイトルにある「独習者、指導教官のために」という言葉通りに、かなり丁寧な作図法の解説が展開されていること、上記の図版解説にみる特徴から、いわば教則本的な、あるいは教科書的な性格の非常に強い著作であった、ということができる。

同著作には、全部で 52 の図版が掲載されている。明確にそれぞれの図版の性格を分類することは困難だが、大まかに言って、このうちの 11 (図版 1, 2, 3, 6, 9, 14, 20, 21, 22, 23, 32) が基本的な三角定規の使用法の説明や線分、円、四角形などの三角形による分割の解説図であり【図-9】、残りの図版は実際に装飾の創出過程(線の構成による装飾、植物や動物のフォルムの装飾、文字などの多様な装飾形態およびそのヴァリエーション)を示したものの、また完成した装飾作品の事例となっている【図-10】。各図版には、そのほとんどにデ・フロート(25 枚)、あるいはヤコバ(16 枚)の署名があり、作成者が解るようになっている。図版最後の 7 つは、特に学生の作品と明記された扉で区分され、応用事例集ともいえるべき役割を担う部分となっている。これらは、デ・フロートがクエリヌス工芸学校で指導した学生の作品であると考えられる。なかには(このうちの 3 枚には)着色を施されたものもある【図-11】。

6. デ・フロートの著作出版の意図と構想

デ・フロートが『装飾デザインにおける三角形』を出版した意図、そして同著作における構想とは、一体如何なるものであったのだろうか。

既述のように、また実際にその内容を一覧してみても、同著作はやはり専門家を対象とするような複雑で難解な、理論書とはいえない。素直な視点から見れば、その内容は装飾デザインのための三角定規を使った作図法を基礎から平易に説明していく入門書的構成を採った、いわば初学者向けの、まさに教科書的存在であったといえる。だが、管見では、同著作が出版後に特にクエリヌス工芸学校で、また他の工芸学校で教科書として使われていたという記録はない。ただ、同著作出版後、クエリヌス工芸学校では、これを教材として使用した可能性は非常に高い。実際、1893 年頃から、デ・フロートがクエリヌス工芸学校で同著作にあるような指導を始めていたという記述は残っているからである¹⁰⁾。また、同書に学生の作品があることは、その裏付けともなろう。したがって、少なからずデ・フロートが自らの研究成果である三角定規を用いる製図法を自分の教育活動における教材として利用し、また他の工芸学校でもそのよ

うに使用されていくことを希望し、目論んでいたという可能性は否定できず、充分にありえることであったともいうことができる。

ところで、当時のオランダの工芸学校における装飾の製図教育とはいかなるものであったのだろうか。

19 世紀末から 20 世紀という世紀転換期におけるオランダの工芸学校教育の具体的な内容については、たとえばオランダの美術史家 H.H.ペイゼルドーミッセの論文に詳しい¹¹⁾。それによれば、ここでは伝統的に、歴史主義的な様式の彫刻や版画、また自然の造形を教室に持ち込み、それを手本に、すなわちモチーフを前にして装飾をいわばフリーハンドで模写する作業が行われていた【図-12】。それは、デ・フロートが「剽窃」と呼ぶ作業に他ならない。これをデ・フロートが、創造行為と峻別していたことは、「前言」の言説と「序論」の内容から明らかである。つまり、デ・フロートの著作出版には、そうした旧来の製図教育を改革しようとする意図を読み取ることができる。

【図-12】 ハールレム工芸学校での製図の授業の様子

(1900 年頃、出典：Pijzel-Dommisse, H.H., et al,

Paviljoen Welgelegen 1789-1989, Schuyt & Co., 1989, p.167

詳細な検討を要するゆえに、ここで論じることは控えねばなるまいが、デ・フロートをこうした方向に導いた要因の一つとして、イギリスの工芸運動の影響があったことは指摘できる。デ・フロートの同著作の出版年は、まさにイギリスの工芸運動の波が実際にオランダ装飾芸術界に押し寄せ始めた時期と重なっているからである。

いずれにしても、デ・フロートのこの著作の出版の意図は、自らが個人的に進めてきた研究の成果、つまり 1893 年頃から実際に教育活動でも採り入れてきた平面装飾の製図法を広く普及すること、そしてその妥当性を世に問うことにあったと考えられる。

「前言」の言説、そして「序論」の内容、また「図版解説」、「図版」から総合して読み取れるデ・フロートの構想は、以下の 2 点に集約できよう。

- ① 三角定規による単純な平面装飾の製図法の妥当性の主張と普及
- ② 剽窃ではなく、創造行為の結果としての意匠の実現

前者について言えば、この著作において、デ・フロートは、三角定規という道具を一貫して利用することで、作図者の恣意性がある程度規定されること、したがって感覚や偶然といった主観性や偶然性によるのではない、より客観的な意匠を導き出すことが可能であること、またそれは三角定規(時には円、正方形)により生み出される角度によって限定されるために、「全体としての整合性を有する」統一的な意匠が可能であること、を主張している。これは後者の構想へと繋がっていく。

三角定規を一貫して利用する製図法から得られた意匠は、統一性

が幾何学によって保証される。そしてそれは過去の歴史主義の様式モチーフ、あるいは自然の造形をモチーフにして行われていた模倣行為としてのデザインとは異なる。つまりデ・フロートは自らの製図法を、創造への可能性を持つ、創造の基礎と指定していたことができる。デ・フロートがこの著作において展開した議論は、平面装飾の製図の領域に限られるが、モチーフという形式、あるいは形態の模倣、つまり剽窃を、リズムというより客観的な概念を導入することによって、創造という行為へと変換させていこうとしたという点で、注目すべきところがあったといえるだろう。

こうした点にこそ、同時代の周囲にいた建築家たちも高い関心を寄せた同著作の革新性がある。実際、同著作はそれ相当の内容と説得力を有していた。

まとめ

以上、デ・フロートの著作『装飾デザインにおける三角形』の構成、具体的内容、また同著作の出版の意図、著者の構想などについて検討を行ってきたが、以下に明らかになった点をまとめておきたい。

- ①デ・フロート単独の著作などともいわれてきた同著作は姉ヤコバとの共著であった。姉の関与は図版作成程度で事実上は、デ・フロート単独の著作といってもよい内容であったこと。
- ②著作の具体的な構成と内容については、デ・フロートが個人的に研究を進めてきた三角定規を一貫して用いた簡単な製図法を紹介するかたちを採り、決して難解な理論書などではなく、どちらかといえば初学者向けの簡単な教則本、あるいは教科書的な構成と内容であったこと。
- ③同著作出版の意図の一つには、自らの教育活動に利用しようと考えていた可能性もあり、また自らの唱える製図法を広く普及させようというものであったと考えられること。
- ④著者の構想としては、過去の歴史主義の様式の模倣、あるいは自然の形態からの剽窃行為に終始する傾向にあった平面の装飾芸術の意匠を、また当時の伝統的な工芸教育の変革を、リズムという概念を導入し、感覚や偶然に頼らない、より客観的な次元での創造行為として実現させ、いわば革新的な工芸教育を可能ならしめようとするところがあったとも考えられ、また自らの製図法の妥当性、さらにはその有効性を世に問うことを目的としていたと考えられること。

同著作にみる模倣とは峻別された創造の可能性の主張こそが、周囲の建築家をして、高い関心を寄せさせた理由であり、実際、同著作はそれだけの内容と説得力があったことも同時に確認できた。また、こうした同著の内容と構想は、後のオランダ近代建築の展開を先ずる革新的なものであったということも可能である。

なお、これまで見てきたデ・フロートの同著作の反響が、いかにして建築の領域に及んでいったのか、また実際にバルラーへら当時の建築家たちにどのようなかたちでそれは影響を及ぼしていったのかという点については、雑誌上での言説、またデ・フロートが提示した製図法に対する見解などが残されており、それらを詳細に検討、

分析する必要がある。また、デ・フロートのこうした著作の内容、そこにみられる構想は、本論でも示唆したように、イギリスの工芸運動との関係を見無視して論ずることはできない。上記の事柄の検証については稿を改めて論じたい。

- 1) Banham, R., *Theory and Design in the First Machine Age*, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts, Second Edition, 1989, p.142. (石原達二ほか訳、『第一機械時代の理論とデザイン』、鹿島出版会、1976年、pp.203-205.)
- 2) Banham, R., *op.cit.*, p.142. (邦訳書 p.204.)、Singelberg, P., *H.PBERLAGE IDEA AND STYLE*, HAENT JENS DEKKER & GUMBERT, UTRECHT, 1972, pp.109、Tummers, N.H.M., *Der Hager Impuls*, KG Hagen, 1972, pp.19-20.を参照した。1898年の「証券取引所」に関する講演での言葉で、雑誌 *Bouwkundig Weekblad*, 1898, p.3.に掲載。
- 3) Slebos, J.C., *Grondslagen voor aesthetiek en stijl*, Amsterdam, 1939, p.5.
- 4) Frank, S.S., *Michel de Klerk 1884-1923 An Architect of Amsterdam School*, UMI RESEARCH PRESS, MICHIGAN, 1984, pp.29-30, Wit, W.D. et al, *THE AMSTERDAM SCHOOL*, MIT PRESS, CAMBRIDGE, 1983, pp.82-86, Fanelli, G., *Moderne architectuur in Nederland 1900-1940*, Staatsuitgeverij, s-Gravenhage, 1978, pp.29-35.を参照した。
- 5) J.H.&J.M. de Groot, *Drie hoeken bij ontwerpen van ornament*, JOH.G.STEMLER C.Z., 1896. 筆者は、原本を入手し、本項の記述はそれを通覧した結果を纏めたものである。なお、筆者所有の同著には著者ヤン・ヘッセル・デ・フロート、ヤコブ・直筆の署名、その下に157とのナンバリングがある。また建築家ヤン・スタイト (Jan Stuyt, 1868-1934) 事務所の刻印もある。出版に際して、デ・フロート姉弟が献本したものと考えられる。
- 6) たとえば Zoon, V.C., *Auf dem Wege zu einer monumentalen "Nieuwe Kunst" - Die Proportionslehre und Entwurfstheorie von J.L.Mathieu Lauweriks*, in: *J.L.M. Lauweriks*, Kaiser Wilhelm Museum, 1987, p.35.などのように、この著作はデ・フロートの単独執筆であるかのように語られることも多い。
- 7) デ・フロートは、クエリヌス工芸学校の卒業生で、1888年9月から1917年1月まで、クエリヌス工芸学校で教鞭を執っている。建築家としての業績は筆者の知る限りでは特に残されていない。詳細は、Martis, A., *Het ontstaan van het kunstnijverheids-onderwijs in Nederland en de geschiedenis van Quellinusschool te Amsterdam (1879-1924)*, in: *Nederlandse Kunsthistorische Jaarboek 30*, 1979, pp.126-128.を参照。
- 8) 本節中の引用はすべて、J.H.&J.M. de Groot, *Drie hoeken bij ontwerpen van ornament*, JOH.G.STEMLER C.Z., 1896., pp.5-6.の「前言」からのものである。
- 9) 本節中の引用はすべて、J.H.&J.M. de Groot, *Drie hoeken bij ontwerpen van ornament*, JOH.G.STEMLER C.Z., 1896., pp.9-11.の「前言」からのものである。
- 10) Martis, A., *ibid*
- 11) Pijzel-Dommisse, H.H., *Het museum en de school voor kunstnijverheid in periode 1877-1926*, in: *Paviljoen Welegelegen 1789-1989*, Schuyt & Co., 1989, pp.151-172.を参照した。

(2000年7月4日原稿受理、2001年2月27日採用決定)